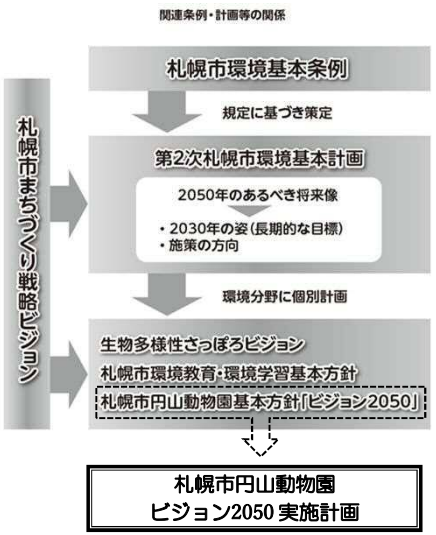
【概要版】札幌市円山動物園ビジョン2050 実施計画（案）

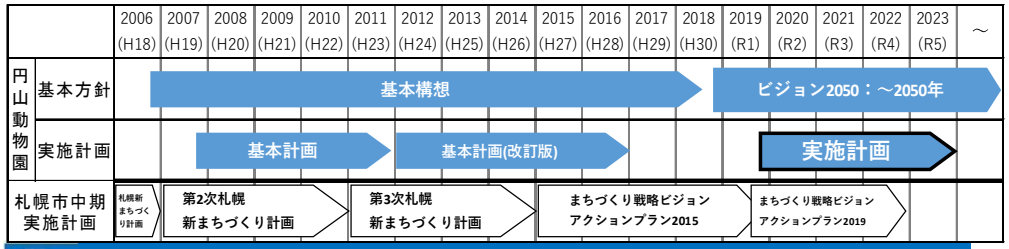
資料３－２

Ⅰ　ビジョン2050実施計画の策定にあたって

円山動物園は、2007年3月に札幌市円山動物園基本構想を策定し、これに基づく基本計画を定め具体的な事業を行ってきた。そうした中、2015年のマレーグマ死亡事案を起こし、動物管理センターからの改善勧告を受けることになり、その後、改善計画に沿って獣医師機能の強化や動物専門員職の新設、開園時間や休園日の見直しを行ってきた。一方、国内外の動物園を取り巻く環境や役割が大きく変わってきており、そうした変化に対応するため、平成31年3月に基本構想に替わる新たな基本方針として札幌市円山動物園基本方針ビジョン2050を策定した。

今回策定する「札幌市円山動物園ビジョン2050実施計画」は、ビジョン2050の基本理念「命をつなぎ 未来を想い 心を育む動物園」を着実に実現するため、動物福祉の向上を根幹に「保全」「教育」「調査・研究」「リ・クリエーション（再創造）」の取組を重点的に推し進めるための実施計画であり、経営に関する具体的な取組についても示しながら、持続可能な動物園運営を目指す。





Ⅱ　円山動物園のこれまでの取組と今後の展開

1　動物飼育について

＜動物飼育のこれまでの取組＞

・身体的特徴を見せる「分類学的展示」から生息地ごとの動物の展示「地理学展示（アジアゾーン・アフリカゾーン」への展示方法の移行
・動物の生活環境充実のための環境エンリッチメントの実施
・動物の連続死亡事案が発生したため、改めて動物福祉の重要性を認識し、そのための取組を始める。
・コウモリの捕獲調査やニホンザリガニの生息状況調査など、保全への取組の実施
・集客を主としたイベントから動物のことを伝えるイベントに移行

＜今後の動物飼育の展開＞

・動物種ごとに動物福祉の自己評価を行い、新たな情報と技術による飼育方法、健康管理・治療、動物の生活の質を高める工夫を探求し、取り入れていく。
・2019年9月に整理した今後飼育展示していく動物種（「推進種」「継続種」「断念種」）の考え方に基づき動物飼育を行っていく。
・ビジョン2050に基づく４つの重点分野「保全」「教育」「調査・研究」「リ・クリエーション」に基づき事業や取組を展開していく。

2　施設整備について

＜施設整備のこれまでの取組＞

・2007年度以降、類人猿館の外放飼場改修、エゾシカ・オオカミ舎、エゾヒグマ館の新築、は虫類・両生類館の改築を実施
・2016年以降は熱帯動物館に変わるアジアゾーン、アフリカゾーンの新設
・2017年度にホッキョクグマ館新設（海外連携を視野に入れた設計）
・2018年度にゾウ舎新設（生息環境に近づけた環境エンリッチメントを取り入れた施設）

＜今後の施設整備の展開＞

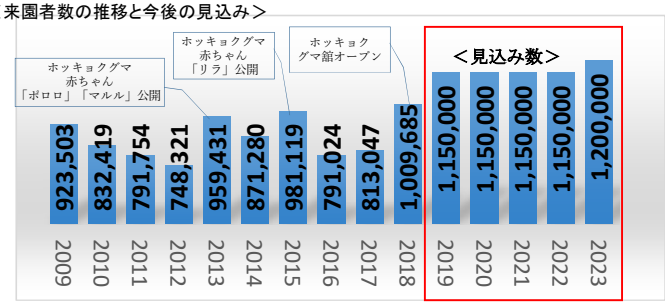
・これからの施設整備では、動物福祉の確保と充実を念頭に４つの重点分野の役割を果たせる空間づくりを目指す。
・動物種ごとの特性を踏まえ、必要な安全対策を図り、飼育動物の快適な環境の提供あいより教育効果が高く来園者にとって魅力的な展示となるような工夫を行う。
・動物舎改築では、限られた予算の中で、法的条件や動物と来園者の安全確保、飼育上の使いやすさなど特殊性を考慮し、動物福祉の充実に配慮した検討を進める。
・老朽化した動物舎の長寿命化のため、優先順位の高いものから計画的に修繕を行う。

3　来園者数の推移

2018年度（平成30年度）は、ホッキョクグマ館の影響により来園者数が増加し、39年ぶりに来園者数が100万人を超えた。

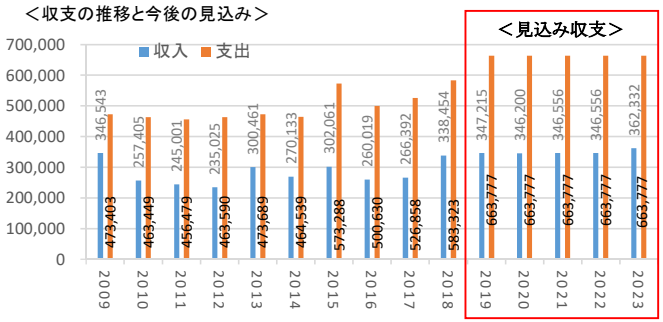
2019年度以降は、この効果を維持しながら推移していくものと見込み、20203年度については、類人猿館の改築による増要素を見込んだ。

＜来園者数の推移と今後の見込み＞



4　収支状況

＜収支の推移と今後の見込み＞



1992年4月の入園料改訂以降、光熱水費、飼料代などの園の運営に要する経費が増加傾向にあり、今後は大規模施設の新設による維持管理経費の増大や施設の老朽化による改修費用の増加等から動物園運営費に占める入園料収入の割合の低下が見込まれている。

このような状況を踏まえ、動物福祉に配慮しながら、安定的な運営を維持していくため、更に効率的な動物園運営に努める必要がある。

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
収入	346,543	257,405	245,001	235,025	300,461	270,133	302,061	260,019	266,392	338,454	347,215	346,200	346,556	346,556	362,332
支出	473,403	463,449	456,479	463,590	473,689	464,539	573,288	500,630	526,858	583,323	663,777	663,777	663,777	663,777	663,777
入園料	274,493	214,254	213,890	192,336	252,143	229,135	267,568	223,603	237,030	304,891	315,529	315,529	315,529	315,529	331,305
支出における入園料の割合	58.0%	46.2%	46.9%	41.5%	53.2%	49.3%	46.7%	44.7%	45.0%	52.3%	47.5%	47.5%	47.5%	47.5%	49.9%

Ⅲ　具体的な事業と取組の展開

「保全」を推進する事業・取組

【成果指標】・希少種や飼育展示していく動物種の考え方に基づく推進種の繁殖種数
2019～2023年度まで　10種（期間累計）
・生息域内保全活動の実施回数　2018年度11回　→　2019～2023年度までの単年度平均20回

主な事業名・取組名	事業内容
ホッキョクグマ保全推進事業【新規】（AP2019事業）	近年動物園が単に希少な野生動物を飼育するだけでなく、実際の生息地における保全活動や生息地保全にかかる教育活動に積極的に関わることが求められていることに鑑み、ホッキョクグマをモデルケースとして、これらの生息地における調査研究・保全活動に携わる期間との連携を通して、これらの生息域内での保全、国際的な枠組みでの飼育化個体群の保全に貢献する。
アジアゾウ飼育技術向上・繁殖推進事業【継続】（AP2019事業）	ゾウの健康管理及び飼育職員の安全確保のため、海外のゾウ専門家による書金への技術研修を実施します。
類人猿改築事業【継続】（AP2019事業）	老朽化が著しい類人猿館について、オランウータンの生態と動物福祉に配慮して、十分な広さを有し、かつ立体的で本来の行動を引き出し、動物園の役割である種の保全や環境教育等の機能面の充実を図る。
種の保存推進事業【継続】（AP2019事業）	国内の動物園、水族館及び保全活動組織と連携し、絶滅危惧種の域外保全、個体群保全の機能強化を図り、国内、特に北海道に生息する希少動物の保護等に係る調査研究を実施するとともに、取組を情報発信します。

「教育」を推進する事業・取組

【成果指標】・園内における解説やガイド実施数　2018年度　1,277回　→　2023年度　1,350回
・総合学習等の受入れ人数　2018年度　8,968人　→　2023年度　10,000人

主な事業名・取組名	事業内容
動物たちの魅力をより深く伝える解説の実施【継続】	動物の能力や生態、生息域で発生している問題などをより深く伝えるため、現在「みんなのドキドキ体験」として、解説や体験メニュー当を実施している。職員による解説としてメニューを定番化するとともに、内容改善のための振返り、職員がお互いに開設に対する意見交換や評価の実施より、解説の充実を図ります。
円山動物園教育推進事業【継続】（AP2019事業）	動物園の飼育動物に冠する情報発信や学習プログラムを提供することで、市民に動物の生息域で起こっている環境問題について知ってもらい、環境保全の重要性に関する来園者の理解を推進します。
団体向け教育プログラムの充実と受入れ方法の見直し【継続】	これまで実施してきた飼料庫ガイドや次世代エネルギー施設ガイドなどのプログラムに加えて年代や目的にあった、これまでよりも多くの人数が受けられるような利用しやすい教育プログラムを開発し、実施する。また、教育委員会等と連携し、団体向け教育プログラムの受入れ拡充が可能な体制及び仕組みを構築するとともに、総合学習に必要な事前学習教材等の開発についても検討を進める。
来園者の学びをサポートする掲示物・情報発信の充実【継続】	来園者の幅広い「知りたい」というニーズに応え、多くの来園者がより楽しく、より深く生き物や環境問題などについて学ぶことができるよう、各動物舎における掲示物やホームページなどでの解説を拡充する。また、教育プログラムや園内ガイドで活用できるような教材を作成する研修を実施し、よりわかりやすい解説に必要な教材の充実を図る。

「調査・研究」を推進する事業・取組

【成果指標】
・学会等で調査・研究内容を発表した回数　2018年度3回　→　2019年度か2023年度までの単年度平均5回
・研究寄稿の発刊　2018年度0回　→　2023年度までに年1回

主な事業名・取組名	事業内容
動物園における調査研究と情報発信の推進	野生生物の保全や、飼育動物の科学的な管理に資するため、動物園の基本的な役割の一つである調査研究を推進します。また、その成果を適切に情報発信し、社会への還元を目指す。

「リ・クリエーション」を推進する事業・取組

【成果指標】・来園者の満足度　2018年度　－%　→　2050年度に100%を目指して毎年割合アップ
・冬季来園者数割合（11月～３月）　2018年度　254,505人　→　2023年度　305,406人

主な事業名・取組名	事業内容
円山動物園おもてなし事業【ﾚﾍﾞﾙｱｯﾌﾟ】（AP2019事業）	国内外の観光客誘客及び来園者の観覧環境充実のため、リーフレット、動物解説板及び各案内表示板当の多言語化、Wi-Fi環境の整備、HPの閲覧のしやすさの向上を図る。
園内関係者が一体となったおもてなし・環境保全活動の取組【新規】	来園者の声やご意見に対応したおもてなしやプラスチックごみ・食品ロスの削減など閑居保全活動を動物園内の売店・食堂・委託事業者等の関係者全体で取り組む。
動物園までのアクセス向上【継続】	JR札幌駅や地下鉄からシャトルバスや路線バスなどの運行について、バス事業者等と連携した取り組みを行うと共に、地下鉄円山公園駅から動物園までの誘導サインを充実させ公共交通機関の利用促進を図る。また、臨時駐車場の確保などを行い、マイカー利用者の渋滞緩和策を講じていく。

取組の根幹【動物福祉】を整える事業と取組

【成果指標】・ハズバンダリートレーニング実施種　2018年度　19種　→　2023年度　35種
・動物福祉評価実施件　2018年度　に実施　→　2023年度　実施完了

主な事業名・取組名	事業内容
動物園動物福祉向上【継続】	動物福祉の向上を目的として、健康の基礎となる栄養管理を中心に見直しを進める。これまでの知見を踏まえつつ、最新の知見に基づき分析・見直しを行うほか、動物の多様な行動を引き出すため、環境エンリッチッチメントの実施対象を広げるとともに、評価、再調整手法の検討を行う。
動物福祉評価【新規】	動物福祉の向上が世界の動物園水族館における極めて重要な懸案事項となっており、世界動物園水族館協会（WAZA）が加盟地域団体等に対して、2023年までに動物福祉にかかる事前評価を完了することを求めていることに鑑み、動物園における普遍的に求められる動物福祉水準を踏まえたガイドラインを策定し、自主評価を実施する。
動物園条例制定【新規】（AP2019事業）	条例制定によって動物園の設置目的や事業内容が明確化されるとともに、動物福祉に配慮した運営が継続的に担保され、より生き生きとした動物の観覧を通して、生物多様性の保全を向けた行動を市民に促す。

基本理念を実現するための基盤を支える事業と取組

主な事業名・取組名	事業内容
今後飼育展示していく動物種推進【新規】	ビジョン2050に基づき、2050年を見据えた今後飼育展示していく動物種の考え方を策定し推進する。また、その中で積極的に繁殖に取り組むとした種については、国内外の飼育個体群の動向を注視し、飼育園館と連携して積極的に繁殖に取り組む。
適正な入園料収入のあり方に関する検討	入園料当の収入や支出経費の見込みを踏まえ、他園館の状況な年間パスポートの利用実態などを調査し、今後の適正な入園料の在り方について検討する。
園内施設維持管理事業【継続】（AP2019事業）	動物園運営にかかる改善勧告に基づいて毎年実施している施設総点検等で、老朽化や不具合、部分的な用途変更等により改修が必要と判断された動物舎等施設について、動物の福祉を念頭に、動物の高齢化対策も含めて飼育環境における安全安心に配慮した修繕を行う。また植栽や園路などについても、安全で快適な空間となるよう整備を行う。

Ⅳ　実施計画の推進に当たって

円山動物園基本方針ビジョン2050に基づき、本実施計画は、次の５つの観点から推進する。

- ◉ 成果目標による進行管理
- ◉市民参加の推進
- ◉人材育成とチームワークの向上
- ◉来園者のニーズ把握
- ◉受益者負担の適正化